



喜田貞吉と平城京址論争 ／信念と学説／今西伊之吉

大和野平條里圖
奈良県立図書館情報館所蔵

本誌では前号に続いて拙稿「喜田貞吉と藤原京」の後編を載せているが、書き漏らしたことが、主に三点ある。

第1に、明治末年における関野貞との「平城京址論争」。別の機会に詳しく論じることとしたが、ざっと要点だけを挙げると、奈良盆地の条里制と平城京遷都との時期の先後に関する問題であった。関野は条里が先にあり条里に基づいて平城京が計画されたと主張した。喜田は幕末の北浦貞政の説を修正しつつ援用し、冬里が平城京の南と北で一致しないこと―不連続―を根拠に関野説を否定した。関野説は多くの支持を集め、現在も定説となっている。論争は喜田の惨敗で終わったが、憤懣やる方ない喜田は死の直前「見損なっていた故関野博士と法隆寺二寺説」という、平城京の敵を法隆寺で討つような論文（遺稿）を残している。

第2点は、喜田が自らの信念を学説として貫いていたこと

うか。本論では否定的な事柄ばかりを並べたくなかったので割愛した。ここでは喜田の『六十年之回顧』から興味深い記事の一つだけ引用しておく。「南北朝正閏論」が決着した後、宮内省の役人から明治天皇は明治24年すでに南朝優先の姿勢を明示されていたと聞き、こう嘆息する。「すでに斯くの如きご決定があらせられた事ならば、南朝正統説は既に決定したものと申すべく、（…）今回の南北朝正閏問題は、全く無用の事に関して徒らに紛争を醸したものであつた」。明治末年の時代性を割り引いても、信念と学説とが直結していれば出ることのない感慨だろう。

第3の書き漏らしは、藤原京の实地調査である。喜田は自らの研究スタイルを「書齋に閉じ籠もつての文献いぢり（…）よりも实地に調査（…）」と言ひ、藤原京についても「嘗て大正初年に調査した所によれば」との記述が見られる。ところ

が喜田の旅行記録を調べても、大正元年から『藤原京考証』（大正2年）を経て『帝都』が書かれる大正4年まで、藤原京近辺に出た記載が見当たらない（その後もない）。ここからは推測である。『藤原京』に見られる喜田の詳細に及ぶ地名や地誌等に関する知識は、今西伊之吉（1875-1922）から齎されたのではないか。今西は現在の奈良県桜井市大福に生まれ、明治34年―短期間ながら―喜田から国史地理を学んだ。先に述べた論争とも関わる喜田の平城京研究の際も―条里制の地図作成も含め―資料収集に奔走した。今西が編纂した『奈良県高市郡志料史料』（大正4年）の藤原京址の項は、喜田の所論がそのまま転載されている。

次号の本欄では『三山谷先生遺稿』も―おそらく独力で―編纂した、今西伊之吉にスポットを当て直してみたい。

（中島敬介）